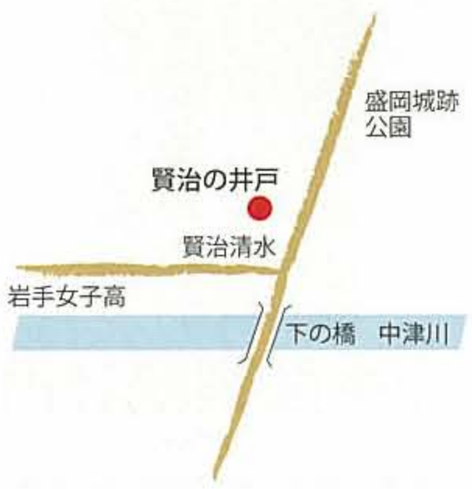
今もその水は枯れることなく

その井戸は、下の橋の近くにあり、今もその水脈は
枯れることなく、通る人々ののどを潤しています。
賢治もこの水も数十年の時を超え
人々の中に生き続けています。

宮沢賢治は、盛岡高等農林学校（現岩手大学農学部）３年21歳の大正６年４月から１年ほど、この共同井戸近くの玉井家に弟の清六と共に下宿していました。

この地は、盛岡市内にある賢治ゆかりの数少ない場所のひとつで、実際に賢治が使った井戸が当時のまま残っています。

現在、この井戸は金網に囲まれて使用することは、出来ませんが、この井戸の水脈から引かれた『賢治清水』が程近くにあり、今でもその水を飲むことができます。

方言短歌「ちゃがちゃがうまこ」は賢治がこの地に下宿していた当時に残したもので、この清水の脇には、賢治自筆による歌碑もあります。

夜明げには
まだ間あるのに
下の橋
ちゃがちゃがうまこ
見さ出はたひと